

PEM021-03

会場:ファンクショナルルームA

時間: 5月24日09:30-09:45

## 今極小期における特異な太陽風の特徴

### Unusual solar wind structure observed during 23/24 sunspot minimum

藤木 謙一<sup>1\*</sup>, 徳丸 宗利<sup>1</sup>

Ken'ichi Fujiki<sup>1\*</sup>, Munetoshi Tokumaru<sup>1</sup>

<sup>1</sup>名古屋大学太陽地球環境研究所

<sup>1</sup>STELab., Nagoya Univ.

太陽活動極小期の太陽風構造が低緯度帯の低速風と高緯度帯の高速風の2成分構造であることはよく知られている観測事実である。これは太陽磁場の構造が、極小期においては双曲磁場成分が卓越することと関連があると考えられている。しかしながら、今極小期の太陽風構造は過去2周期のものとは大きく異なっていることが名古屋大学太陽地球環境研究所で実施している惑星間空間シンチレーション観測、および探査機ACEによる観測から明らかになった。

今極小期の太陽風構造の特徴としては、①低緯度帯に高速風が出現し、その起源が極域ではなく低緯度に出現したコロナホールであること、②低緯度起源の高速風を挟むような低速風帯が観測されている③極大期に比べ安定した構造と考えられている極小期の太陽風構造の変化が速いこと、があげられる。

この様な特異な太陽風構造の原因として、今極小期の太陽磁場が過去2周期と異なっており、特に、極域磁場が弱いことが低速風の配置に大きな影響を与えている可能性がある。

本講演では、今極小期の太陽風について観測データを紹介しその特徴を議論する。

キーワード:太陽風,速度構造,太陽活動極小期

Keywords: solar wind, velocity structure, sunspot minimum